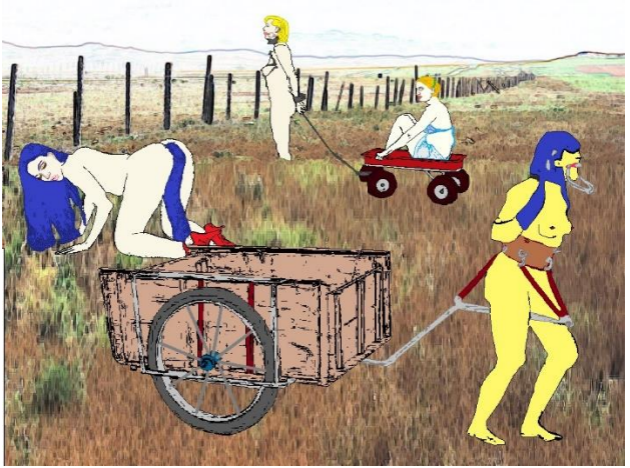


S M ツアー：貴女の妄想叶えます

第2話：ドンキーガール



濠門長恭

登場人物

高山昭雄（４５）

Splendid Marvelouse Tours 社長。

真性マゾ女性のための裏ツアーを手掛けている。

木島菜穂子〔ドンキーアッス〕（３８）

〔アナルステップ〕

ご主人様の出張中を預けられた。オーナー専属の牝馬。

〔バレンプッシー〕

無精子症の夫に、繁殖目的で入厩させられた。

〔プアブーブス〕

最年少。性的な意味で父親の愛娘。

〔ピンクラビア〕

バイセクシュアル。自ら望んで入厩した。

〔プッシーダンサー〕

親族の総意で強制入厩させられた。

父の遺産相続権を放棄しない限り出厩できない。

ジャクソン（６２）

サトウキビ農園主。ミリオネア数人と共同で牧場を経営している。

レディー：女調教師　　ミスター：調教師

カルロ&ニッコロ：馬丁の親子

目次

- 0. 起業と性癖と - 8 -
 - 1. 覚悟の入厩 - 11 -
 - 3. 苛酷な荷役
 - 4. 週末の狂艶
 - 5. 強制入厩
 - 6. マゾの刻印
- 後書

Splendid Marvelouse Tour へようこそ！

弊社では貴女様の被虐願望を叶えてさしあげるために、

Suspenseful Option System

を御用意致しております。

Non Vartual / Non Fantasy / Non Role- playng

最少催行人員は1名様です。

末尾のメールフォームより、できるだけ詳しくご要望をお知らせください。

弊社が貴方様に最適のプランを提案させていただきます。

なお、貴女様の安全は社会的にも肉体的にも守れるよう最大限の努力を致しますが、必ずしもこれを保障するものではありません。

(現在まで、事故例はありません)

弊社にて定期的に催している企画もございます。国内限定で安全性も高く、料金も超格安に設定していますので、まずはこちらをお試しになられては如何かと思えます。

- 1：新年寒中水泳 1月4日（日帰り）
催行人員：1名様～30名様
参加費：交通費のみ（諸経費はお客様負担です）
男性同伴者との参加も可能です。
禪での参加ですが、胸に晒を巻いていただきます。
- 2：禪海女ショーと夜の鮑売り 夏季随時、
日程応相談
催行人員：1名様～3名様
参加費：交通費のみ（諸経費不要）
・地元女性の参加者が素潜りを指導します。
・鮑売りは自由参加です。
（売上代金の75%を還元致します。）
- 3：夏季柔道合宿 8月12日～8月17日
催行人員：3名様～8名様
参加費：交通費＋3万円（諸経費含む）
・練習、宿舎とも男女同室です。
・道着は素肌に着用していただきます。
・柔道未経験者にも、手取り足取り指導いたします。
- 4：寒中座禅修行 12月10日～12月16日
催行人員：2名様～5名様
参加費：交通費のみ（諸経費不要）
・修行は女性のみですが、一般男性が補助します。

- ・警策は肩だけを叩くとは限りません。
- ・座禅転がしは拒否できません。

その他、各種企画を検討中です。

国外でのイベントも新たに立ち上げました。
国内に比べてリスクが高くなります。

A：女囚性務所 不定期

催行人員：1名様～3名様

参加費：一般ツアー費用に準じます

・実際に女囚（前科にはなりません）として2週間程度のVIPへの性的奉仕に従事します。

・看守たちの女囚への虐待は日常化しています。

・日常生活および性生活に支障が無い程度の半永久的な肉体への損傷を受けます。

・当国内外の長期服役囚もいますので、言動には気をつけてください。

その他、ポニーガール、裸族性人儀式、男女格闘技戦などを検討・現地調査中です。

SMツアー有限公司

0. 起業と性癖と

高山昭雄が大手の旅行会社を辞めて独立したのは、二年半前だった。有限会社の形をとってはいるが、実際には個人経営であり、元の会社の下請け業務が主な収入源だった。格安をうたい文句にするツアーの下請けだから、利益はゼロに等しい。二十年も業界にいて内情を知りつくしながら、それでも割に合わない起業に踏み切ったのは、彼の一種倒錯したフェミニズムによるところが大きい。

高山は若い頃、ツアーコンダクターをつとめていた時期があった。旅の恥は掻き捨てだが、インターネットがそれほど普及していなかった当時、ツアー参加者は恥の捨て場所を知らない。とうぜん、高山は夜も観光案内にいそしむことになる。ナイトクラブや公認の売春館ですめばまだしも。東南アジアや東欧へのツアーともなると、●●買春の斡旋までさせられた。不法な要求を毅然と断わるどころか、共同正犯になったのだから——彼の倫理観や遵法意識も底は見えている。

その手の観光客には好評だった彼にも、苦手な相手がいた。ごく一部のマニアックな女性である。娼婦の真似事がしたい、SM館で本格プレイをしてみたい。それくらいならツテはある。しかし。

「麻薬所持で逮捕されても、肉体の賄賂で釈放されるってほんと？」

「ポニーガールの牧場が、この近くにあるとネットで見たのですけれど？」

「淫らな女は公開鞭打ちで罰せられるんですよ？」

「女子割礼って、成人女性でも受けられるのですか？」

合意、あるいはフィクショナルな関係におけるマゾプレイではなく、現実世界での被虐を体験したいという女性たちだった。実際にハードなSMプレイをしている女性もいたし、妄想逞しい処女もいた。後者は自分の妄想が現実となったとき、おそらくその場では後悔するだろう。しかし、日が経つにつれて、当時を思い出しながらオナニーに耽るのではないか。高山は、そう考えた。

現実世界での被虐を安全に体験させるには、相応の事前準備が必要だった。ポニー牧場を例にとれば、まずオーナーとの信頼関係を築かなければならない。撮影の諾否についても、参加者と牧場側とで取り決めておく必要がある。高山が話をつけた牧場は裕福なサディストたちの共同経営だったが、ポルノの販売や男性訪問者からの高額な〈寄付〉で運営費の過半をまかっていた。

事前準備の手間は一般ツアーとの比ではない。現地スタッフに丸投げもできないし、官

憲に賄賂が必要な場合もある。赤字すれすれの弱小旅行社が手がけられる仕事ではなかった。それでも高山が専属の裏社員を雇ってまで『スプレディッド・マーベラス・ツアー有限会社』を起こしたのは、特殊な願望を秘めた女性への奉仕であると同時に……ツアーコンダクターからの詳細な（たいていは写真が添付された）報告書、自分ひとりではとても体験しきれない数々のシチュエーションを堪能するためだった。

三つの国内企画を裏ページで公表したのが、一年半前。五回の催行で参加者は延べ十七人。たったこれだけの需要のために二人の専属スタッフを抱えているのだから、大赤字もいいところ。

とはいえ、あまり大っぴらに宣伝もできない。それどころか。表ページの隅っこに成人女性限定のアンケートを設置して、プライバシーに係わる質問も含め百以上の項目に答えさせ、その結果をAIに分析させて、合格者だけ裏ページに辿り着けるようにしてあるくらいだ。

高山はSOSを維持するために、父が遺してくれた貸しビルの収益をすべて注ぎ込んでいる。つまりは道楽、それともおのれの性癖を満たす代償行為なのだった。

1. 覚悟の入厩

延々と続くトウモロコシ畑を割って一直線に伸びるハイウェイ。高山はアクセルに軽く足を乗せてオートクルーズで走りながら、満足と焦燥とを同時に感じていた。

今回のSOS（Suspenseful Option System）は、特定の顧客のために企画した最初のツアーだ。結果が悪くなければ、不定期に催行する企画に採用するつもりだ。そういう意味では、きわめて順調だった。

今は社長（というほど大袈裟な会社ではないが）みずから、一頭の牝馬を人間牧場へ輸送中。輸送後は東部へ行って、男女異種格闘技戦というよりは、リョナファイトの下調べをする予定だった。

企画は増えていくというのに、裏添乗員は村上詩織と西川麻凜の二人だけ。しかも詩織は、アジア某国の女子性務所で服役中。人手が足りない。

裏ページでもそれとなく募集はしているから、月に一人くらいは裏添乗員への応募者もいた。しかし、高山の目で見て素質のある女性はいなかった。

物思いに耽りながらも、高山は清涼飲料の小さな看板を見逃すことなく減速して、ハイウェイをそれて細い道にハンドルを切った。

さらに三十分。車は広大な休耕地を走って、柵で囲まれた一画にたどり着いた。柵の中には数棟のプレハブ建築と牽引式の大きな水タンク、それに五台のトレーラーハウス。恒久的な建築物は見当たらない。

柵の手前で車を止めた。高山が車から降りると、十秒ほども間をおいて木島菜穂子が助手席側のドアから降り立った。

柵の内側は手入れの行き届いていない芝生になっていて、中央だけが楕円形に地肌を剥き出していた。そこで行なわれている調教風景を、菜穂子は食い入るような目で見つめた。しかし、驚きの表情はなかった。四人の若い女性がコルセットのような胴着だけを身に着けて、乳房も下半身も露出したまま、足並みをそろえて行進しているというのに。

高山は芝居っ気たっぷりに菜穂子の二の腕をつかんで、柵の出入口まで連れて行った。いちばん小さなプレハブ小屋から肥った男が姿を現わした。洗いざらしのオーバーオールとTシャツ。質素な農夫に見えるが、この男が牧場主で、広大なトウモロコシ畑の持ち主でもあった。

「菜穂子さん。ここで裸になってください」

高島のとんでもない要求を、菜穂子は当然のように受け入れた。ブラウス、ブラジャー、ショートパンツを脱ぎ、スニーカーも脱いで素足になった。さすがにショーツを脱ぐ手つ

きにはためらいがうかがえたが——全裸になると、どこも隠そうとはせず、両手を身体の脇に垂らした。

七月の乾いた風が、菜穂子の火照った肌を煽る。

菜穂子は昨夜のうちに除毛フォームで首から下は産毛すら一本も無い肌にしていたので、色素の沈着した亀裂までが二人の男の目に晒された。いや、三人だった。ビデオカメラを構えた男が菜穂子の裸身にレンズを向けている。

牧場主が菜穂子のまわりをぐるりと巡って、尻の張り具合をたしかめるようにぴしゃぴしゃと叩き、重さを量るように乳房を持ち上げた。歯並びでも見るのか、顎をつかんで口も開けさせた。

菜穂子は黙って、されるがままになっている。

「この牝はポニーの資格がない。歳を食いすぎているし、馬体に締りが無い」

TOEIC七百八十点の菜穂子は訛りのきつい牧場主の英語を理解して、唇を噛んだ。

そんなことは自覚している。すでに三十八歳。百六十三センチなのに六十二キロ。アンダーバストとウエストが同じ数字で、ヒップは大きい。

「預かるなら使役馬、いや、荷物運びのロバとして扱うことになる」

それこそ菜穂子が夢想していた境遇、あらかじめ高山と牧場主とで取り決めていた待遇なのだが、他人に言われると屈辱に感じる。そしてその屈辱が、菜穂子の股間を熱くさせた。

「それで結構です。では、一か月の預託料として千五百ドルを収めてください」

高山が封筒を牧場主に手渡した。つまり、菜穂子はSMクラブの客のような立場にある。いや、客は高山で——菜穂子は専門家に調教を依頼された牝馬だった。菜穂子には調教の中断を求める権利はない。プレイ中に〈お慈悲を願います〉と言うと手加減、〈お赦してください〉で責めを中止するといった合言葉の類もない。しかも一日五十ドルの預託料は、素顔を晒したポルノ撮影に同意したうえでの金額だった。

「すぐに調教を始めるが、見学していくかね？」

「シュア」

高山は即答した。そして、菜穂子の脱ぎ捨てた衣類を拾ってカメラの視界から遠ざかった。パスポートも高山が預かっている。絶対に逃げ出せない状況——それも、菜穂子が希望したことだった。

牧場主は短い乗馬鞭で菜穂子の尻を叩いて、大きな扉のある倉庫のような建物の前まで追い立てた。

「カルロ、ニッコロ。新しい仕事だ」

建物から二人の男が出てきた。

「こいつらは馬丁だ。おまえの調教と使役を担当させる」

カルロは六十絡みの痩せた男、そばかすだらけのニッコロは二十代半ばといったところだった。顔つきが似ているから、父子かもしれない。

「おまえにも名前が必要だな。ドンキーアスがいい」

ロバの肛門。屈辱的な名前だが、それがこの牧場主の趣味だった。

「こいつに荷役用のフルハーネスを着けてやれ。荷馬車は重量物運搬用の二穴牽引だ」

ニッコロが隣の小屋から、リヤカーほどの大きさの荷車を引いてきた。ふつうのリヤカーにはコの字形のハンドルがついているが、これは一本の棒で牽引するようになっていた。リヤカーの下から伸びた引き棒が途中で鎌首をもたげて、腰の高さでまた水平に伸びている。その水平な部分に、短い間隔で大小二本の鉄棒が屹立していた。前側の鉄棒は、直径が五センチを超えていた。後ろも四センチにちかい。

カルロが荷台から大小の鉄枷を取り出した。

「じっとしてろよ」

大きな鉄枷を菜穂子の首に嵌めてボルトで締めつけた。手を後ろにまわさせて、鎖でつ

ながれた手枷を嵌める。手枷の鎖が首枷につながれて、菜穂子の手首は腰の上まで引き上げられた。

(七年ぶり……かしら?)

二十三歳から二十八歳までの五年間、菜穂子は特定のご主人様にマゾ牝として調教されていた。その後もしばらくは出会い系などで知り合った相手とプレイをしていたが、ウエストがアンダーバストに近づくにつれて消極的になっていった。独り遊びは別として、七年ぶりに味わう拘束の苦しきだった。いや、これまでは縄がほとんどだったから、鉄枷の重みを肌で知ったのは、これが初めてということになる。

菜穂子がつぎに装着されたのは乳枷だった。これも生まれて初めての体験だった。

湾曲した二本の鉄棒で乳房の上下を挟み、両端と乳房の谷間にある三本のネジを締めつけながら、カルロが乳房を引っ張って鉄棒を食い込ませていく。乳房の基底部がぺちゃんこにつぶれて、そのぶん膨らみが強調される。「くうう……」

この牧場へ来て初めて、菜穂子が声を漏らした。

カルロは、完全に乳房をつぶしきる手前でネジを止めた。乳房の谷間のネジに細い鎖をつなぎ、引っ張り上げて首枷につないだ。

「みごとなバストアップですね。ドンキア

ッスも悦んでいるでしょう」

高山がカメラマンの横に近づいて感想を述べた。

菜穂子はさらに革のコルセットでウエストを絞られた。呼吸も満足にできないほどだったが、地面に落ちた影にくびれがあるのを見て、嬉しいような悲しいような複雑な気分になった。

最後に馬銜を嚙まされた。肩甲骨の高さでそろえていた髪をツインテールに結われて露出した首の後ろに細い革ベルトを巻かれ、V字形をした硬質ゴムを舌の奥まで突っ込まれた。歯の当たる部分が太くなっているのも、子音はもちろん母音すらも満足に発音できない。

ハーネスのつぎは、蹄鉄の替わりだろう平べったいサンダル底のようなゴムを、瞬間接着剤で足の裏に貼り付けられた。馬場で調教されている四人の娘たちはヒールの高い紐サンダルを履いているから、それよりは歩きやすそうだが、責め具として見栄えがしないのが、菜穂子には不満だった。

そうして、いよいよ荷車につながる。

ニッコロは荷車の前に菜穂子を立たせて、引き棒を跨がせた。

「あ……」

いきなり股間に手を差し込まれて菜穂子は身をよじったが、すぐ正面に向きなおって背

筋を伸ばした。カルロが前から菜穂子の肉壺を蹴り、ニッコロは背後から枷で絞り出された乳房を揉みしだく。乱暴だがねちっこい愛撫で、菜穂子は蜜をしとどに絞り出された。

その蜜が、引き棒に溶接された二本のディルドに何度も塗りたくられた。カメラマンは、その様子もクローズアップで写している。

引き棒が持ち上げられるとディルドが股間の花卉に埋没し、尻の谷間に隠れた菊座を抉る。平行に屹立しているディルドは、膣と直腸の角度とは合っていない。それを強引に押し込まれた。

「んん、んんんっ……」

下腹部をえぐられる鈍痛に菜穂子は呻いた。しかし挿入が終わると、著しい膨満感が残ったが痛みはおさまった。

鉄棒の先端は環になっていて、短い鎖で乳枷の下につながれた。

カメラマンが二十メートルほど前へ出て片手を上げた。

「ゴーアヘッ！」

ぴしっと追い鞭で尻を叩かれて、菜穂子は足を前へ踏み出した。とたんに、下腹部を重い痛みが襲った。反射的に腰をかがめると、尻を強く鞭打たれた。

「ゴーアヘッ。まだ荷物を積んじゃいないぞ。怠けるな」

「んんん、んんーん！」

下腹部の痛みをこらえながら思いきり括約筋を締めて、菜穂子は歩き始めた。

地肌が剥き出しの馬場と違って手入れの行き届いていない芝生なので行き足がつかず、苦痛も軽くなならない。痛みを引きずりながら、菜穂子はカメラマンの前を通り過ぎ、そのまま馬場の外側を一周させられた。距離にして五百メートルはあっただろう。

もし荷物を積まれたらとても耐えられないだろうと、早くも脂汗を浮かべながら菜穂子は戦慄した。

「よーし、止まれ」

元の大きな建物まで戻ると、菜穂子はへたり込んだ。しかし、膝をつく前に引き棒の下辺が地面につっかえて、菜穂子は股間で体重を支える結果となった。

荷車の枠から鎖が伸ばされて、背後から乳枷の両端につながれた。

菜穂子は、ほうっと安堵の息を吐いた。これなら――身体を前へ倒せば、胸で荷車を曳ける。

カルロとニッコロが荷車に乗り込んだ。

「よーし。受け渡し小屋まで往復だ」

長い追い鞭で腰を打たれて、菜穂子は前傾姿勢になって足を踏み出した。

「んんんっ、んん、んんんーっ！」

胸で曳くといっても、下半身への負荷もじゅうぶんに残っている。コルセットで腹を締

めつけられているうえに胸まで圧迫されて、息もますます苦しい。

ぐいと乳枷が左に引かれた。意味は明白だ。菜穂子は左へ蟹歩きしながら荷車の向きを変えようとした。それまでとは異なる角度からの痛みが、下腹部を苛む。

柵の外へ出て、車で来た方角とは反対に向かって進んだ。舗装されていないでこぼこ道は、芝生よりずっと曳きづらかった。車輪がゴトンゴトンと窪みを乗り越えるたびに、二本のディルドが股間を突き上げる。それは圧倒的に苦痛の割合が大きかったが、性的な刺激も菜穂子に与えた。

カメラマンが忙しく動きまわって、菜穂子の苦闘を存分に撮影する。

「ゴーアヘッ。もっと速く」

両肩を追い鞭で叩かれた。乳枷がぐいと後ろに引かれて上体が起きた。そのぶん、胸で強く曳けるようになったけれど――足を前へ踏み出すときは腰からの動きになるので、下半身への圧迫は減らなかった。

「んんっ、んんっ、んんっ……！」

一步ごとに呻きながら、菜穂子は二人の男が乗る荷車を曳いた。

わずかの休息も与えられず四十分ほども荷車を曳きつづけて、日除けの屋根だけが掛けられた資材置き場のような場所に着いた。菜穂子の全身は汗にまみれ、股間から太腿にか

けては性器への刺激で絞り出された蜜がべったり垂れていた。

「朝はここから荷物を運ぶ。夕方には空容器やゴミを持ってくる。俺たち二人分より、ずっと重いぞ」

ニッコロが薄汚れたタオルで菜穂子の身体をわざと乱暴に拭く。髪をつかんで顔をあおむかせ、ペットボトルの水を口に流し込んだ。

「んん、んほっ……」

馬銜に舌を押さえられているので、菜穂子はうまく呑み込めずにむせた。それでも、渴ききった喉には生暖かい水が甘露な清涼飲料のように感じられた。

二人の馬丁は、それ以上に荷役ロバをいたわることなく、また荷車に乗り込んだ。

「ゴーアヘッ」

乳枷を右に引かれて菜穂子はその場で荷車の向きを百八十度変えると、尻を左右同時に叩かれて、人間牧場への道を引き返して行った。

荷車を曳くコツがすこしはわかってきたので、九割の苦痛と一割の快感とに苛まれながらも、菜穂子は二人の馬丁がかわす言葉に聞き耳を立てる余裕もできた。

二人は、やはり父子だった。イタリア系移民の子孫で、祖父の代からずっと雇われ農民だった。牧場主に命じられたのと興味本位とで馬丁になってみたが、STD予防のために

セックスまで管理されていて、とくに息子のほうは欲求不満をつのらせている。

そこへドンキーアッスの世話を言いつかつたのだから、菜穂子にとっては不運なのか幸運なのか。牧場に着くのも待ちきれず、菜穂子の三つの穴をどの順番で責めるか、父子は荷車の上で相談を始める始末だった。

——牧場に着いたとき、高山の車はすでになかった。

みずから強く望んでのこととはいえ、取り返しのつかない選択をしてしまった。これからの三十日間、自分はポニーガールよりも格下の荷役ロバとして調教され酷使されるのだと……菜穂子は不安にかられながらも妖しく胸ときめかせ股間を熱くするのだった。